

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

2021年度 大障教本部交渉

12月24日、大障教は教育振興室長をはじめ、各担当課長と本部交渉を実施し、施設の老朽化対策、旅費予算の増額、産休等代替教職員の速やかな配置、学校の適正規模・適正配置による教職員の負担軽減、看護師の定数外配置による教職員の負担軽減、「教職員の評価・育成システム」廃止などの重点要求について、担当課長の見解をただし、改善を求めました。

施設の老朽化対策による

教職員の負担軽減を

東住吉支援学校分会は、今年度3回起きた天井崩落の事案に関わって、教職員が天井設備の安全点検を行う、安全面における十分な情報共有がない中で子どもや保護者の対応を行うことによる教職員の負担増大の実態を突きつけ、老朽化による校舎・施設の改修を求めました。

施設老朽化改修 評価・育成システム廃止などを訴え

「過大・過密」の 抜本的な解消のための学校建設を

代替講師の速やかな配置、看護師の定数外配置

施設財務課は、「府立学校の老朽化については、平成28〜30年度までに専門業者による建物調査を行い、築年数や劣化度などをもとに、『府立学校長寿命化整備方針』にもとづく『事業実施計画』を策定し、計画的に改修を行っている」「事故を未然に防止し、安全確保のために法定点検をはじめ、日常における点検を徹底し、点検の結果により緊急性の高い改修等については、計画的に行う予防保全とは別に、速やかな現地確認や技術的な検討を行い、必要な対策を講じている」「東住吉の3回の事故は、老朽化だけでなく様々な要因が重なって発生している。事故はあってはならないが、事故をまったくゼロにすることは極めて難しいと認識している」と回答しました。

大障教は、築50年前後の他校でも様々な施設設備の事案が発生している実態にふれ、施設設備の老朽化に伴う事故で子どもや教職員がケガすることは断じてあってはならないと主張。学校における安全安心を確保するためにも50年をメドに校舎を建て替えるなど抜本的な対策を講じることを強く求めました。

教職員の定期的なPCR検査を

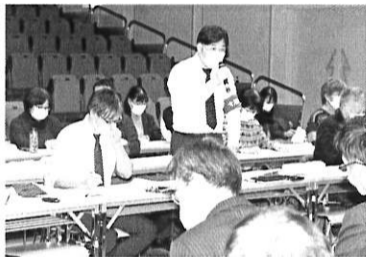
新型コロナウイルス感染症が急速に拡大した第5波(2学期当初)の府立支援学校の臨時休業状況や教職員が安心して児童生徒に関わることができない心理的負担など現場の実態をもとに、感染対策として公費による教職員へのPCR検査実施を求めました。

福利課は、「PCR検査体制については、国において順次拡充されているところである。今後とも国の動向を注視したい」「無症状者で不安を抱える方については、大阪府でも無症状者が無料で受けられる検査体制を府内100カ所以上で実施するという方針を示した」「現段階では、学校においては濃厚接触者や陽性者が出た場合に対応していく」という回答にとまりました。

疫学調査協力を学校に課さず教職員の負担軽減を

新型コロナウイルスの感染拡大の緊急事態宣言下、保健所の疫学調査協力を学校が行うもとの、濃厚接触者リスト作成に伴う教職員の負担増大の実態を示し、本来業務である保健所対応し、教職員の負担軽減を図ることを求めました。

保健体育課は、「基本的に疫学調査は保健所が行う業務であると認識している」と述べながら、「令和3年9月2日付の通知」



現場の実態を突きつけ、
抜本的な対策を求めました

「特定の教職員に過度の負担がかかることがないように、十分に留意するよう指導していく」などと述べるにとまりました。

大障教は、コロナ対応で増大する教職員の業務実態にふれ、緊急事態宣言下であっても教職員の負担を増大させることはあってはならないと主張しました。(本部交渉の後半部は次号に掲載します。)

書記局の カジノ

吉村大阪府知事と松井大阪市長は、大阪にカジノを誘致するための「区画整備計画案」を公表し、この2月議会で「議決」したうえで、4月28日までに国に提出しようとしています。

そもそもカジノは、人の不幸を食い物にするもので、刑法が禁ずる賭博そのものであること。そして、カジノで経済成長などはないこと。韓国では、カジノ中毒による社会的損失はカジノの「経済利益」を4〜5倍上回っているといわれています。さらにカジノ誘致のためのインフラ整備などで莫大な公費負担のしかかり、ひとたび「大阪誘致」を決めれば、むしろ35年間、「廃止・撤退」はできず、その間、カジノ事業者のいいなりに府民・市民の負担が増える危惧があるなど、あまりにも大きな問題点があります。

加えて12月に夢洲の土壌汚染問題によって、790億円もの税金が投入されることが明るみに出されました。積算根拠等が示されておらず、今後さらに膨れ上がる可能性が指摘されています。「カジノには税金は一切使わない」と言ってきた知事・市長の過去の説明からみても許されるものではありません。

この間、住民説明会や公聴会、パブリックコメントなどがなされてきましたが、府政だよりや市政だよりでの周知もなければ十分な情報開示もない、形だけを取り繕うもので、「地域住民の合意」を得ようとする姿勢は微塵もありません。

いまの計画、やり方で「カジノ誘致」につきすすむことは、大阪の街にとって「100年の大計」を誤らせるものです。

「吉村さん、松井さん、カジノよりコロナ対策ちゃんとして、うちの命と暮らし守ってや」

全国
障害児学級&学校
学習交流集会

困難な中でも行き届いた教育をおこないたい！ 全国の仲間の声を聞くことができた分科会

1月10日、全国障害児学級&学校学習交流集会の2日目は、大障教サテライト会場で報告者と複数名の参加者で分科会で学びあいました。

「病弱の子どもたちの教育実践」分科会は2本のレポートの報告がありました。

学校の先生からは「コロナ禍の施設内訪問学級の取り組み」について報告がありました。

私たちが小児がんで病氣と闘いながら、最期まで学び続けた2人の子どもの足跡を報告しました。

「Aくん」と行ってきた自宅と分教室とをつないだ遠隔授業。原籍校の授業をVRカメラで撮影し、その動画を見ることで安心して復学できたAくんの事例。

Bくんが「自分のことを知ってほしい」思いを持ち、復学したその日にクラスメイトに自分の病氣について説明したこと。

「いのちの授業」をしてほしいとBくんの原籍校に呼ばれ、私たちが「彼の生きざま」について原籍校の子どもたちに授業をしたこと、などを参加された方に聞いていただきました。

奈良の特別支援学校からは、病棟と連携を図りながら感染予防もしっかりとおこない、オンラインも活用して日々の学習をおこなってつてきた奮闘ぶりが伝わってきました。

想も持ちました。分教室は復学した時勉強で困らないようにする場所だけでなく、少しでも楽しく子どもが子どもらしくいられる場所であると同時に、「退院してからどのような生き方を

いに応える分教室(院内学級)を目指して」というテーマを発表し、奈良県の特別支援学

校の先生からは「コロナ禍の施設内訪問学級の取り組み」について報告がありました。

私たちが小児がんで病氣と闘いながら、最期まで学び続けた2人の子どもの足跡を報告しました。

「Aくん」と行ってきた自宅と分教室とをつないだ遠隔授業。原籍校の授業をVRカメラで撮影し、その動画を見ることで安心して復学できたAくんの事例。

Bくんが「自分のことを知ってほしい」思いを持ち、復学したその日にクラスメイトに自分の病氣について説明したこと。

「いのちの授業」をしてほしいとBくんの原籍校に呼ばれ、私たちが「彼の生きざま」について原籍校の子どもたちに授業をしたこと、などを参加された方に聞いていただきました。

奈良の特別支援学校からは、病棟と連携を図りながら感染予防もしっかりとおこない、オンラインも活用して日々の学習をおこなってつてきた奮闘ぶりが伝わってきました。

想も持ちました。分教室は復学した時勉強で困らないようにする場所だけでなく、少しでも楽しく子どもが子どもらしくいられる場所であると同時に、「退院してからどのような生き方をし

全国障害児学級&学校学習交流集会(1日目全体会については1月25日号に掲載)に、大阪から参加したみなさんの感想を紹介します。



全体会

○障害児学級の立川先生のお話は、私自身も小学校の教師なので、実践で大切にされていることが、ある6年男子との関わりを通して心に響きました。障害児学校の佐藤先生のお話には教師としての構えに必要なポイントがわかりやすく教えていただける「理論」が示されていて学びが大きかったです。

○立川先生のお話は、子どもの変化に敏感で心を育てる姿勢が印象的でした。佐藤先生のお話は引き込まれました。子どもたちに未来や希望を語れる教師になりたいと思います。

○モアタイムねりまの青年のみなさんの話が聞けて、自分の想いを語れる力が大切に育まれていかなければいけないと思いました。最後の河合先生の言葉にあったように、教育者の自由、子どもが主人公の学校というのが今の学校から失われつつあると感じることが多く、苦しくなることが多いですが、つながりの大切を感じる話でした。

○リレートークでは、共通しているのが子どもの思いに寄り添うことだなと思いました。思いを代弁すること、職員の思いを押しつけるのではなく子ども自身が決定すること、このことを私自身大事にしたいと思いました。

○リレートークを聞いて、子どもたちが安心して過ごせる居場所があること、またつくられていくこと、つくりあげることが大切なことだなとあらためて感じています。

分科会

○13分科会では、1本目のレポートでは、生きる力をどうやってつけていくのか、寄宿舎で出来ることは何だろうといった中での実践を聞いていて、やっぱり自分たちがやればできるといった自信や経験が必要だなと思います。それぞれに合ったやり方があるけれど、一人ひとりの生活が豊かになるための方法やどうすればいいのかと考えられる力をつけられるように支援を追求していかないといいなと思いました。

これまで顔を合わせて学びあってきましたが、全国の病弱教育の仲間と交流したいという思いがあればどこからでも参加できるZOOM開催も悪くはないのかな、という感

困難な中でも行き届いた教育をおこないたいという全国の仲間の声を聞くことができました。

ある県の施設内特別支援学校では、コロナ禍で「感染予防のため教育を受ける機会が少なかった子どもたちをこのまま卒業させてよいのだろうか」と教員どうしが保護者も交えて話し合い、卒業を延期し一年かけて学びを取り戻そうとした取り組みが出されました。



集まれば元気！ 分会のとりくみ

大教済座談会を兼ねて昼食会をおこないました

コロナ禍の中、分会として集まる機会が作れず新しく来られた方々との顔合わせもできずにいましたが、感染状況が少し落ち着いた年末に「大教済」から相談会の依頼があり、思い切って新年の旗開きを兼ねて昼食会を開催することにしました。もちろん感染予防対策は万全を期して、三密対策、消毒換気、アクリル板での隣席遮断など考えられることは全ておこないました。分会長の挨拶はこの間のコロナ禍での苦労や困難の多々、また管理職とのやり取りについていろいろと説明がありました。食事をとりながらの交流でワイワイガヤガヤとはいきませんでした。新しく来られた方と顔合わせもちょっぴりできて楽しいひと時になりました。「共済」や「保険」の相談にも多くの方が来られていて、今後も説明会の必要性を感じました。(佐野支援分会 北野 雅之)

